竹島俊之先生の「最後のことば」

『プロピレア』第 19 号編集部

日本ギリシア語ギリシア文学研究会　佐藤　りえこ様、

この文章は（中略）闘病中での言葉のため、文章がまとまっていないところもありますが、父の希望により最後の父の論文としてプロピレア 17 号に掲載をお願いいたします。

平成 18 年 8 月 28 日　竹島　道雄

四年前の 8 月 29 日、竹島俊之先生のご葬儀の合間に、昭子夫人とご子息の道雄さまから一通の手紙を託されました。先生の「最期の手紙」には上掲のご子息の筆による短い文章が添えられていました。

編集部では、竹島先生のご家族の意向を尊重し、先生を偲ぶよすがとして、『プロピレア』第 19 号に「竹島俊之先生の『最後のことば』」と題した文章を発表することにしました。手紙のなかで、竹島先生がご自身の古典ギリシア語研究や語学教育を回想された部分を公開いたします。

なお、先生の主要著作等目録と同様に、この「最後のことば」からも先生のご研究がたどれるように、編集部で若干の注をつけること、竹島道雄さまの私信を載せることを快諾してくださったご家族に感謝いたします。

『プロピレア』第 19 号編集部

文は主語と述語から成り立つ、という一見して誰もが気づく虚偽の定義。なぜこれが打ち破られないのだろうか[1]。しかも、それに気づくだけで、世界中のあらゆる言語の資料が自由に読めるようになるというのに。ドイツ語文法は、非常に早い時期にその定義から、離れ、定動詞＋主語、主語＋定動詞という動詞の位置だけで構文を分析し、一年間の語学教育で文献が読めるようになり、大きな成果をあげてきた[2]。語学は簡単な教育で自由に文献が読めるようになるからだれもが興味を持つのである。好きな文を暗唱し、一日中その言語に密着することによって、その言語に通暁できるようになる[3]。そのためには学ぼうとする構文構造が正確な形で学習者に伝えられていなければならない[4]。構文にかかわる語順規則はもとより、未来という時制形式も重要であるし、形容詞と名詞の間の語順関係[5]も重要である。Schwyzer, *Griechische Grammatik II*で話し手と関わりのある、この時制形式の重要に気づいていたからである[6]。話し手の意思を客観的な時間の流れの中に入れてみるとまさに未来の中に位置している。そしてどの言語でも未来形はすぐに取り出されるのである。

言語の本質的なことがらは、文献の中に現れていて、その文献を丁寧に扱い、調査することによって、正しい知識が得られる。このことは疑いないことである。しかし、時制体系は子供が母親と遊びながら、せいぜい五歳くらいまでに習得すると思われる。したがって子供の言葉を観察していると、すぐにそれが見つかる。

1 人称「話し手の意思」:
「枯れ木に花をさかせましょう」
2 人称「話し手の強要」:
「おかあちゃん、このおもちゃかってよう」
3 人称「話し手の推量」:
「こんな時間までになってもかえってこないのよ、紀子、帰ってくるかしら」
—— 「帰ってくる」

なぜ、客観的な未来の中にある行為に関して現在形しか使えないのだろうか。それは未来形が話し手の「意思に」かかわっているからである[7]。

[1]「古典ギリシア語の人称表現の実態」『言語文化研究』広島大学総合科学部紀要Ⅴ、第 11 巻（1985）p.126
「伝統文法において一般に行われている、主語と述語という規定の仕方に対して、テニエールは主語をその特権的地位からひき降ろし、目的語と並列的に動詞に依存する行為項 actant とし、動詞中心の統語論を展開しているが、本稿は彼の理論が古典ギリシア語の統語構造を記述する上でも有効であることを、具体的資料に基づいて例証することを目的とする。」
[2]「古典ギリシア語の構文論研究（2）」『プロピレア』第 14 号（2002）p.41
「また動詞の位置の説明だけで、しかもその語順に細心の注意を払うように教えながら、現代ドイツ語の基本構文をわずか一年間の学習で習得させ、二年目からは普通の読み物を教材として使用できるようにしている『現代ドイツ語文法』の記述は非常にすぐれた記述の仕方であると言えるだろう。」
[3]「古典ギリシャ語の学び方」『プロピレア』第 10 号(1998)p.2
「初級文法を習う段階では一つ一つの形態を覚えていく必要は全くない、と私は考える。『文法がわからなくなったら文法書を見ればいいじゃあないか、それよりも大切なのは早く書き言葉の世界に入りこんで、その言語で書かれたたくさんの作品を読むことだ。古典といわれるものはどの作品でも読者を虜にしてしまうほど力強い牽引力を持っている。その力によって数多くの作品を読んでいくうちに、あのあまりにも複雑にみえていた語形も自分でも気づかぬうちに全て覚えてしまっているのだ。』という言葉を私はよく使う。」
[4]「古典ギリシャ語の学び方」『プロピレア』第 10 号(1998)p.3
「したがって、一つ一つの練習問題はギリシャ語の構文構造の特性を自分が納得する形で把握しないかぎり、理解できないのである。そして構文構造を正確に把握してはじめて書きことばの世界に入っていけるのである。この問題に挑戦して格闘している間に『文』とは英文法で主張されているように、主語、述語、目的語から成り立っている、というような単純な構造ではなく、定動詞句、分詞句、不定詞句などが一定の内的規則によって配列され、統治されて形成される、と言うことが自然にわかってくる。その一定の内的規則というのが構文規則である。その構文規則を会得してはじめて書き言葉の世界に入っていけるのである。」
[5]「古典ギリシア語の構文論研究（2）」『プロピレア』第 14 号（2002）pp.31-38、
「古典ギリシャ語の形容詞の収斂的語順と展開的語順について」『プロピレア』第 15 号（2003）pp.28-44
[6]「古典ギリシア語の構文論研究（2）」『プロピレア』第 14 号（2002）p.31
「英語以外のさまざまな言語の入門書の未来表現の説明は、非常に不十分であると指摘できる。話し手が自分の意思をどのようにして言い表すのかは、言語学習の最初の段階で適切に説明しておかなければ、その言語の世界に抵抗なく入っていくことはできないと私は考える。なぜなら文学作品の中で未来表現が最も頻繁に現れるのは、当然のことであるが、会話の中においてであり、このことからも未来時制が『話し手の意思』を表明している、あるいは『話し手の意思』と何らかの関わりがあることが裏付けられるからである。」
[7]「古典ギリシア語における未来時制についての一考察」『言語文化研究』広島大学総合科学部紀要Ⅴ、第 10 巻（1984）pp.212-232